

故郷

高見正明

影長く寒鴉の飛びし麥畑の遠き果てては暉き沈む

町並のふと朴絶えたる縣道は石橋を越えて川に沿ひたり

石橋は石の色古りし彎曲を朝靄ふ川の面に映せり

往還の理髪屋にゆき一枚のガラスの外の川音を聞く

故郷は溶くるがごとく戀^{こひ}しかり鏡面にうつる川面のひかり

野の末に灯は瞬きぬ暗き空をわたる風音は吹きつのりつゝ

田舎なる灯暗き驛の板椅子に思ひて居りし一とせのこと

遠見ゆる灯影^ほ明りを熊本と休暇の意識はわれに安けし
(三首六藝の驛にて)